

# 短期大学図書館の資料検索について

高 島 涼 子

## ま え が き

短期大学図書館は、ここ数年、図書館の新築及び電算化という、画期的な事業に取り組んでいる。この二つの現象は、それぞれ、全国的な規模で起きており、短期大学図書館のあり方を大きく変えようとしている。

この図書館の新築と電算化という事業は、いうまでもなく、多くの面でその中で働く人々にいくつかの選択を迫り、決定をうながすものでもある。つまり、それぞれの図書館は今後どの方向に向けてその歩みを進めるのか、どのような機能を持たせ、どのような機能を捨てるのか、新しく迎えるべき図書館の役割をどのように規定するのか、現状を出発点とするなら、新しい事態の中で次のステップは何であるべきなのか、……等の問いに対する答が否応なく要求されるのである。

そして、これら二つの現象、特に電算化の問題は、すべての図書館にとって避けて通ることのできない問題である。従って、すべての図書館が、何らかの形で、この問題に取り組まざるを得ないのであり、解決の道を決定しなければならない。

まず「短期大学図書館はどうあるべきか」という目標を設定しなければならないし、次に、それぞれの図書館が現在に至った歴史をふりかえらなければならないであろう。さらに現状を把握し、実現可能な次の段階を認識し、実行に移してみなければならない。多くの場合、図書館は、理論よりも実践においてその進むべき方向を見い出しているからである。

国や地方公共団体をスポンサーとしている他の館種と違って、私立の短期大学図書館は、比較的自由な活動の許されている館種といえる。またその故に種々の制約も受けているが、特にその利用の面において、多いに開拓の余地がある。この画期的な変革の時にあたり、機能面、利用面から、短期大学図書館の資料検索について考えてみたい。

## 1. 短期大学図書館のあり方

検索機能について考える場合、個々の図書館、あるいはある館種全体として、その特性ともいえるべき要求されている機能をとらえ、その中で一つの機能として、資料検索を決定する必要がある。では、短期大学図書館ではどのような機能が要求されているのであろうか。

短期大学は、2年でその課程を終了するというあたりまえの事実が、種々の制約を引き起して

## 高 島 涼 子

いるのであるが、それらの制約が、特性ともなっている。研究期間であるには、短すぎるこの時間を皮肉にも学生はほとんど認識していない。入学する年と卒業する年しかない短期大学においては、よほど図書館が綿密な2年間にわたるスケジュールを組まない限り、学生の多くは図書館と無縁のまま過ごしがちである。学生自身のスケジュールが先行し、しかもスケジュールに対して、時間は圧倒的に短いのであるから、入学時オリエンテーションに始まり、卒業研究に関する資料提供に終る、図書館との関わりを確実なものにしておく必要がある。

また、学生に要求される研究水準は、4年制大学のそれとは比較にはならない一方、学生数が比較的少ないため、図書館においては丁寧で個別的な対応が可能である。

以上の特性から、短期大学図書館に求められている主な機能は、学習資料の提供であると考えられる。学習と研究の両面における資料の提供は、短期大学図書館の現状を考慮する時ほとんど実行不可能である。研究面を切り捨て、学習面の資料提供に徹することで、むしろ、短期大学図書館のあり方がより明確になると考える。

学習面に徹するということは、しかし、容易なことではない。学習に必要な資料をあくまで提供し続けるには、図書館員の不断の努力が必要である。綿密な相互貸借システムの確保、館員による所蔵資料の熟知、選書に対する細心の注意、カウンター業務における適切な言動等が常に要求される。図書館のサービスも、必要な資料を提供するための、予約サービスの実施や、貸出方法の制限撤廃等、可能なものから実行されなくてはならない。開館時間を長くし、利用者の学習意欲をより多く刺激するような資料を紹介する必要がある。公共図書館では当然の事が、短期大学図書館ではまだまだ実施されていない。学習資料の提供という見地に立つと、そのことがよく理解できる。経費をかけ、人的資源を投入する以前にも、なすべきサービスはあるといえる。

では、このような機能を持つ短期大学図書館にあって、利用のキーポイントともいえるべき、資料検索は、どのような形が最も適切なのであろうか。どのような検索機能が望まれるべきなのであろうか。

## 2. 資料検索について

### 2. 1 ネーム・アプローチ (name approach)

検索には、ネーム・アプローチと主題アプローチがあるが、ネーム・アプローチについて、まず述べたい。

短期大学図書館において、ネーム・アプローチは必要であり、重要な検索方法の一つである。多くの学生は、書名、あるいは著者名目録（あるいは name catalog）を使用している。これは、後述する図書館の利用指導と密接な関係があるが、利用に耐え得る目録であり、かつ指導が適切であれば、利用者は大いに目録を使用するものである。本学図書館のアンケート調査によれば、特に、書名目録の利用が活発であるように思われる。<sup>1)</sup>これは、書名の方が著者名より利用しやすい、親しみをもちやすいことを示しているのかも知れない。また、一度目録を利用した利用者は、直接

1. 「点鐘」No. 4 (1983) pp. 2～6

書架に行くより、目録を使用した方が、結果的には早く必要な資料を入手できることが理解できるようで、特に本学図書館では利用指導実施後、目録を使用している利用者の姿を見かけることが多くなった。

しかし、このネーム・アプローチにも問題がないわけではない。書名の冠称の問題は、NCR 新版予備版によっても、完全には解決されておらず、カタログにその決定を任せられている困難な問題の一つである。冠称を含む書名と含まない書名の両方のカードを作成している図書館も多いと思われるが、この解決方法でも、いたずらにカードの枚数のみが増大するという別の問題を引き起こし、しかも確実なアクセス・ポイントとはなり難い場合もあるのである。

著者名目録に関しての問題点の一つに、漢字で書かれた中国人、韓国人、朝鮮人の読みの問題がある。今までの慣習として日本語の読みを与えている図書館がほとんどだと思われるが、西洋人の読みと同じように、その国の言語の音を表記すべきではないだろうか。日本人の名前を、たとえば中国語で読んだとしても、日本人なら誰もその音を聞いて自己の名前と認識はしないであろう。名前は、特に一個の人間に固有のものであり、ひいては人格をも表すものであるから、人間の思想を取り扱う図書館において、特に注意深くありたいものである。なおそれによって検索が困難になる場合は、参照カードを作成すればよい。

NCR 新版予備版は、書誌機能を捨て、検索機能のみを追求する記述独立方式を採用したため、書誌機能には対応していないが、短期大学図書館においては、必要と思われる事項に対しては、何らかの措置が必要である。

このネーム・アプローチは、しかしながら、完全に正確な固有名詞を必要とするので、自らの判断のみで資料を検索する利用者には、不向きの点もある。よほど明確な意志と要求がない限り、特定の著者の、特定の書名を記憶することは困難である。しかも、小説等のフィクションと違って、学習資料であれば、多少なりとも専門的、学術的にならざるを得ない。このような資料は、多くの場合、似かよった書名を持ち、著者は、研究者以外にとっては親しみのない名前である。そして、大多数の利用者は、自らの要求に無意識であり、単に思い浮かべたイメージのみで図書館にやってくる。こうした利用者には、図書館員がその求めている情報の正しい形を認識させなければならない。何のために、どこで、どのような理由で、どのような情報が必要なのかを確認する必要がある。このような場合には、当然ネーム・アプローチではなく、主題アプローチが必要となってくる。

## 2. 2 主題アプローチ

上述したように、多くの利用者＝学生は、どの情報あるいは資料が最も必要なのかを認識せずに、検索を始める。彼らは組織的に、あるいは段階的に検索することをしない。彼らの検索をより具体的に、より明確にするのがカウンター業務の主な仕事であるが、ではそのための主題アプローチはどのような形態が最も望ましいのであろうか。

利用者は、通常二、三の手がかりとなることばを持っている。このことばは、十分アクセス・

## 高 島 涼 子

ポイントとなり得る場合となり得ない場合とがある。なり得ない場合には、同意語が必要となる。主題アプローチは、主題をあらわすことばで検索するのであるから、(分類目録も、相関索引の使用から始めるので、ことばからの検索となる。) 検索することばが適切でなければ検索は不可能となる。

主題アプローチに際して、最も問題となるのは、検索することば=アクセス・ポイントの決定である。このアクセス・ポイントの決定には、NDC 相関索引、シソーラス、参考図書の索引などがあるが、これらが利用者にとって、いつでも利用できる状態にあり、利用者もこれらを使いこなす能力を持たなければならない。また、主題アプローチの手段としての分類目録、件名目録も、このアクセス・ポイントに十分対応できる機能を持たなければならない。

分類目録が正確な意味での分類目録であるかどうかは、疑問の残る所であるが、短期大学図書館においては、主題アプローチの主流となっている。しかしながら、その作成と維持が困難であるため、検索機能を十分に果たしているとはいえない。何よりも分類目録は、利用者の要求している概念と分類番号の関連性が利用者にとっては不可解であり、分類大系の全体を理解することは困難であり、主題による分類と形式による分類が混在していることや、十進法のルールが一定ではないこと等が、さらに理解を困難にしている。整理担当者には当然のことが利用者にとっては理解し難く、分類目録を使いこなすためには、一定の時間の学習が必要である。

また作成する側にも、何を重出、分出するのか、関連分野の参照はどうするのか、等の問題点があり、正確な分類目録の作成は、非常に難しいと言わなければならない。件名目録の作成はさらにそうである。

学校図書館での例があるように、直接ことばで検索できる件名目録は、その検索機能のみを考えるなら、利用が容易でない分類目録と比較して、より短期大学図書館にとって有効な検索手段であるように思える。単行本のみならず逐次刊行物もその対象とするなら、その機能はますます有効となる。しかし、その作成、維持については、分類目録の作成、維持以上の困難さが伴い、その有用性は理解しながらも、実施までにはいたらない図書館が多いと思われる。利用者の持っていることばで検索するのに、最も近い方法が件名目録であるにもかかわらず、それを持つことができず、分類目録も正確とはいえない状況では利用者へのサービスは、従って、主に館員の記憶に頼らざるを得ない。

現在の短期大学図書館の資料検索は、

各種目録+開架式+館員の記憶

という図式になる。検索機能の面からみれば、ネーム・アプローチはほぼ可能であるが、主題アプローチの面では、館員の優劣が、その機能を決定しているといえる。つまり、一定期間以上の勤続年数を持ち、図書館サービスに熱意を持ち資料を熟知している館員が存在しているか否かで、その図書館の検索機能が決定されることになる。このような“human resources”は、貴重な存在であるが、今後さらに多様化し、大量化していくことが予想される情報には、人間の記憶の容量はあまりにも小さいと言わなければならない。

不備な、そしていずれは物理的な限界を迎えるであろうカード目録と、それを補いきれない現在の状況を打ち破るものが、電算化であることは明白であるように思えるが、次にこの電算化について考えてみたい。

### 3. 電算化について

#### 3.1 カード目録の限界

ナンシー J. ウィリアムソン氏 (Nancy J. Williamson) は、「目録に未来はあるか 2006年の情報アクセス」(Is there a catalog in your future? Access to information in the year 2006) の中で、「目録は確実に過渡的状态」<sup>2)</sup>にあり、

我々は、100年以上も前から存在する目録を、それが提供する書誌的および主題からのアクセスの仕方については、重要な改良を何ら施すことなしに、完成へと近づけてきたのです。それにまた、現代技術の利用が可能な、書誌的資料の主題検策に対する最新アプローチに関する実験も、充分に行っていないのです。<sup>3)</sup>

と述べ、

カード目録の有用性がすでに、図書館の外部で作成・維持される書誌情報提供手段からの挑戦を受けている。<sup>4)</sup>

と警告している。また、

目録は情報に対して限られたアクセスしか許さない道具に留まっています。<sup>5)</sup>

とも述べている。

彼女は、21世紀の社会を、paper-less 社会、あるいは Wired City としてとらえ、紙の需要が極端に減少するであろうとも予測している。

図書館の主要な検索手段としてのカード目録は、約一世紀にわたって重要な役割を果たしてきたのであるが、21世紀に向けてその務めを終えるのであろうか。いくつかの大図書館では、すでにカード目録を凍結しており、今後のこの傾向はますます広がるものと思える。短期大学図書館においても、やはりこの時代の波に逆行することはできないであろう。従来のハウスキーピングにおける電算化から、資料検索の分野における電算化に至るまでの経過は、今後の資料検索の内容そのものの発展を容易に予測させる。

カード目録による資料検索は、2. で述べた以外にも、標目の読みの表記の問題、固有名詞の統一の問題、主題決定の困難さ等の問題があり、解決されないまま電算化の時代を迎えたわけであるが、電算化がなされたとしても、これらの問題は、依然として未解決である。特に、主題アプローチに対しては、まだまだ多くの問題、あるいは電算化によって新たに派生した問題がある。

---

2. 目録に未来はあるか 2006年の情報アクセス ナンシー J. ウィリアムソン著 樋川清司訳  
現代の図書館 vol. 21 No. 3 (1983) p. 183.

3. 同 上

4. 同 上

5. 同 上

最も劇的な変化が起こる可能性があるのは、主題からの情報アクセスを提供するのに使用される手法や仕組みです。……新しい情報システムを設計する上で決定的に重要なのは、これまで以上に効果的な主題表示と検索の手法を開発することなのです。……

主題からの情報アクセスのあらゆる側面について、調査・研究が絶対不可欠です。そうした調査・研究の対象としては、情報を求める人の諸要求、索引のプロセス、索引言語の作成、開発、それに新しい情報環境に相応した、効果的な探索戦略および検索技術の創造などがあげられます。

満足の行く主題検索の基本となるのは、効果的な主題検索法および主題目録法であり、そこでの要件とは、利用者、文献、索引言語そして利用可能な技術の間にみられる関連性の理解をもとにした、優れた索引法なのです。……

より有好なアプローチは、文献に対し、その内容に基づいた正確な表示を与え、システムが文献の主題に対応するように求めるといえるものでしょう。<sup>6</sup>

カード目録には、機能的にも物理的にも限界があることは事実だが、まずその限界を見きわめ、電算化にどのような機能を望むのかを明確にしておく必要がある。

### 3. 2 電算化による資料検索

私立短期大学図書館協会が、短期大学図書館の電算化を熱心に勧めており、その出版物が具体的に、現在の時点でどのような仕事がコンピュータで可能なのか詳しく示している。<sup>7</sup>しかし、電算化によって、資料検索の機能にどれだけの変革がもたらされるものなのかは、現在のところ過渡的な状態にある。電算化によって、今まで不可能であったことが可能になりつつはあるが、ウィリアムソン氏の指適にあるように、その利用方法は、旧来の目録の概念に比較して、独創的であるとはいえない。プログラムの設計、ハードウェアの進歩如何では、未知の可能性がまだまだ存在しているように思える。図書館員が優れて想像的であり、状況分析が適確で、真にオリジナリティーがあるなら、この未知の可能性はやがて現実となって現われるに違いない。

その一つの方向づけとして、次のような考え方がある。

第一に、利用者の資料アプローチの実証的研究を通じて、各図書館での目録政策の立案能力の育成が必要でしょう。

第2に、レファレンス教育と関連しますが書誌サービスの基礎技術の訓練、書誌の編成や索引の作成、抄録作成などを取り入れるべきではないでしょうか。

今後の目録業務は、基礎的書誌情報サービスを前提として、資料の書誌的特性を正確に把握・記述して書誌を編さんしていくことと、情報検索の要求に対応した主題分析技術の二つの方向

6. 目録に未来はあるか2006年の情報アクセス ナンシーJ. ウィリアムソン 樋川清司訳 現代の図書館 vol. 21 No. 3 (1983) pp. 189-190

7. マイコンによる文献管理 私立短期大学図書館協会編 日本図書館協会 1984.

に発展してゆくのではないかと予測しています。<sup>8</sup>

図書館が存在意義を全うするためには、目録担当者の多くが図書館学の確固たる基礎知識の他に、十分な主題の知識を持つことが必要になるであろう。<sup>9</sup>

現在の、図書館内の状況も、図書館をとりまく社会的状況も絶えず変化している時、図書館が、この変化に対応していくことは、困難である。

It would appear that the most pressing problems facing librarians as information providers are related to technology and economics. But the two forces seem to be working against each other: while technology is expanding and changing with new inventions being announced every day by the high technology industry, the library's financial ability and physical capacity to purchase and maintain those resources continue to diminish or, at best, remain stable.<sup>10</sup>

まさに日本の図書館にこそあてはまる、このような状況が、アメリカ合衆国においてもいえることは驚きであるが、しかし、変化に対応していくことは、必要なことでもある。資料検索のあり方を、今後各図書館が模索し、追求し続けていくことが、電算化を一層効果的なものにするだろう。新しい器には、新しい考え方が必要だからである。数年後には、ハードウェアの互換性も実現されるであろうし、そうなれば、さらに旧来の思考方法から脱皮しなければならない。21世紀に向けて、短期大学図書館が図書館として存在し続けるために、資料検索は、より適確に、より早く、そしてより多くの情報を提供するものでなくてはならないだろう。大切なことは、電算化によってどのような図書館を創造していくのか、ということである。

### 3. 3 相互貸借について

コンピュータの持つ効率の性格上、蔵書数の比較的少ない短期大学図書館の電算化に際して、現在は各図書館が独自の力で可能な活動を何とか試みている状態であるが、全国的規模、あるいは地域的規模での相互貸借システムを形成していく必要性のあることを認めないわけにはいかない。

中小図書館を対象としたネットワークの形成は、非常に多くの問題と同時に、多くのメリットをももたらせるものである。それぞれの図書館が、個性ある蔵書を構成すれば、問題の多くを解決するであろう。長期的展望に立って、地域性を生かし、スクール・カラーを尊重していく資料の収集は、相互貸借の必要な条件である。個性あふれる図書館の集まりは、資料検索にとって多

8. 全国的目録情報サービスと図書館誌上フォーラム カタログの教育と研修 〈in-service training〉について 石塚栄二氏の回答 現代の図書館 vol.14 No. 3 (1976) p.134.

9. 目録担当者と目録業務の将来 ロバート P. ホーレイ 著 坂本博訳 現代の図書館 vol.20 No.1 (1982) p.54.

10. "Preparing Libraries for Change", by Robert D. Stueart, *Library Journal*, vol.109 No.15 (1984) p.1724.

いに魅力的であると同時に、それぞれは“remain stable”であっても、いくつかの館が集まれば、大きな力となることを示せるチャンスでもある。

また、整理業務においても有効なシステムといえる。

The solution to the problem of producing cataloging lies within the power the networks have given us—a comparatively cheap, ready method of accessing cataloging data from distributed sources<sup>11</sup>.

もちろん、合衆国のようなネットワークが、日本の短期大学図書館界において、形成され得るかは予想すらできないが、その利用方法は参考になる。たとえば、Japan MARC その他の database の共同使用等、電算化がなされた図書館間のコミュニケーションは、現在とは大きく変わるはずである。

電算化された相互貸借システムは、非常に想像的なものであると同時に、厳しく個々の図書館のあり方を問うものでもある。

#### 4. 図書館利用指導と資料検索

利用者の図書館に対する意識を刺激し、系統的、段階的に資料の収集をしていく方法を指導することは、図書館の大切なサービスの一つと考えられる。そしてその最終目標は、利用者一人一人が独力で、図書館を資料収集の窓口として利用しながら、資料収集にあたるようになることである。これは短期大学卒業後の図書館利用とも密接に結びついている。

資料検索がいろいろな角度から可能であればあるほど、利用指導は効果があがる。資料アプローチの方法として、最も一般的なものはカード目録であるが、他に各図書館独自の二次資料も作成されなければならないであろう。利用指導の一つのポイントは、参考図書の利用である。従って、各館の参考図書の目録及び書誌解題は、利用価値がきわめて高いものとなる。主題あるいは形式別の解題目録は、参考図書の利用を、より容易にし、また適確にする。

資料には、また、いろいろな種類 — 単行本、雑誌、紀要、新聞、視聴覚資料等 — があり、最近では、このような種類に応じた検索が徐々に可能になりつつあるが、それぞれの図書館の利用形態により、独自に工夫し、作成しなければならない二次資料もある。各図書館の逐次刊行物目録は、その最も基本的なものといえる。

利用指導を実施することによって、資料検索の不備が明らかになってくる場合も多い。前述したカード目録の不備や、目録使用に際しての補助 tool の不備、参考図書及び逐次刊行物目録の必要性、資料排列の妥当性、館員の再教育の必要性、利用者に対する指導のあり方等が、問題となってくる。また、改めて相互貸借の重要性が認識される。これらの問題を一つ一つ解決しながら、より効果のあがる利用指導法を研究し続けなければならない。

利用指導は、つまり、資料検索にとって、一つの大きなチャレンジであるということができる。

11. “Librarians: the Next Generation”, by Allen B. Veaner, *Library Journal*, vol. 109 No. 6 (1984) p. 624.



館員の自己満足のためではなく、利用者のためにこそ、資料検索は存在するということを、利用指導は教えてくれるのである。図書館のあり方を決定する重要な鍵を、利用指導は握っているのである。

### ま と め

図書館は、その向かうべき方向が明確でありさえすれば、問題の大半が解決しているといえるであろう。時代の波がおしよせても、方角を見失わなければ、図書館は図書館としてあり続けることができる。

Libraries and the indivisual librarians working in them must not only welcome the future, but also believe they have a stake in shaping it.<sup>12</sup>

そして資料検索は、その中で、常に利用者の存在を考えていけば、自ずと道は開けていくように思える。もはや、図書館が静かな読書と勉学の間であった時代は去り、利用者の要求に対応し、あるいは利用者の要求を引き出していく、積極的な場所となっていることを認識すべきである。

### 参 考 文 献

- 大学図書館における現状と将来 倉橋英逸著 現代の図書館 vol. 20 No. 1 (1982)  
目録法の動向について 坂本 博著 現代の図書館 vol. 14 No. 3 (1976)  
「目録法の危機」再説 現代の図書館 vol. 14 No. 3 (1976)  
岡山大学附属図書館における目録の編成について 木村正昭著 図書館界 vol. 30 No. 2 (1978)  
整理業務の現状と将来 浅賀律夫著 現代の図書館 vol. 20 No. 1 (1982)  
70年代から80年代へ 大学図書館をめぐる若干の論点 松田上雄著 図書館界 vol. 33 No. 1 (1981)  
新旧の探求について 鈴木勘也著 現代の図書館 vol. 20 No. 1 (1982)  
図書分類における主題検索機能と書架配列機能の分離 青山 弘著 図書館界 vol. 34 No. 6 (1983)  
現代の図書館 特集 図書館の未来像 vol. 34 No. 6 (1983)  
現代の図書館 小特集「図書館の未来像」を読んで vol. 22 No. 2 (1984)  
学校図書館 特集 I 目録の整備と活用 No. 319 (1977)

---

12. Stueart, *Ibid.* p. 1726.